

# 泊園書院に学んだ実業家たち

—東暎・南岳叙位祝賀会の発起人に着目して

横山 俊一郎

The businessmen who learned at Hakuen Shoin

—Focusing on the founders of the celebration called  
Togai and Nangaku jyoishukugakai

YOKOYAMA Shunichiro

This paper introduces the brief biographies of the businessmen who were the founders of the celebration called Togai and Nangaku jyoishukugakai of Hakuen Shoin. They were the students of Hakuen Shoin. Among the students, there were more people involved in business than those involved in politics, medical care, and education. In other words, the businessmen were the people who supported the prosperity of Hakuen Shoin in the Meiji era. It can be said that the people in this paper were those who especially supported Hakuen Shoin among the students. As a result of the consideration, it was found that they were appointed to the posts of the academic organization called Hakuenkai, and asked inshu of Hakuen Shoin to write classical Chinese. In addition, they established and managed modern industries such as banking and spinning, and were also enthusiastic about political activities, social works, and cultural activities. From these facts, it became clear that Chinese studies and modernization in Japan were closely related through their activities.

キーワード：泊園書院、藤澤東暎、藤澤南岳、門人ネットワーク、実業家

## はじめに

筆者は吾妻重二教授が主宰する KU-ORCAS の研究ユニット「東アジアの中の大阪の学統とネットワーク」に KU-ORCAS アルバイトスタッフおよび関西大学東西学術研究所 PD として関与してきた。具体的には、泊園書院の門人帳のデジタル化とそれを踏まえた門人略伝の作成を進めてきたが、本稿ではこの経験を通して得られた知見を踏まえて、ユニットの一つの目標である「泊園書院を中心とした実業界とのネットワークの再現」を試みたい。

先日、上記の門人略伝の作成が完了し、最終的に約 700 名分の略伝を作ることができた。この成果は吾妻重二監修、横山俊一郎著『泊園書院の人びと』（仮題）として刊行する予定であ

るが、筆者がこの過程で驚いたのは、約 700 名の門人中 200 名以上が実業に携わっていたことである。これは政治、医療、教育など他の職能に携わった者よりも多い結果であったので、やはり泊園書院と実業界との間には深いかかわりがあることは間違いないだろう。そこで、彼ら泊園書院出身実業家の略歴を残らず紹介すれば、上記の目標を達成することが期待できるが、紙幅の制約上そうするわけにはいかないので、本稿では彼らのうち東咳・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめた者に限定して簡単に紹介することとする。

この東咳・南岳叙位祝賀会とは、大正 4 年（1915）大正天皇即位の大礼実施にあたり、泊園書院の初代院主・藤澤東咳とうがけいが従四位、その子の第二代院主・藤澤南岳が正五位に叙されたことを記念して催された祝賀会のことである。祝賀会の発起人には門人 150 名近くが就任したが、このうち実業に携わった者が 55 名もいる。彼らは泊園書院出身実業家のなかでも泊園書院に思い入れのある者であったと予想され、先述した目標を達成するにあたり、その性格の解明が待たれる人々といえるだろう。

以上のような理由により、本稿では東咳・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめた泊園書院出身実業家 55 名の略伝をその出身地方（ただし大阪のみ近畿地方より独立）ごとに示し、そのうえで彼らの性格の特徴を六点に分けて提示する。<sup>1)</sup>

## 1. 中部地方出身の実業家

以下は東咳・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめた中部地方出身の実業家の略歴である。<sup>2)</sup>

本多政以（1864-1921）は加賀藩（石川県）の家老・本多政均まさちかの長男。明治 13 年（1880）南岳門人の大城戸宗重の勧めで泊園書院に入塾。明治 30 年（1897）織物工場「葵機業場」を設立、のち石川県農工銀行頭取、金沢電気軌道社長に就任。のち貴族院議員。

本多政由まさよし（1867-没年未詳）は本多政均の三男、本多政以の弟。明治 17 年（1884）泊園書院に入塾する。帰郷後は兄政以の「葵機業場」の経営を助け、明治 36 年（1903）金沢電気の取締役。金沢市輸出羽二重同業組合組長、共同火災保険金沢出張所所長も兼務する。

加藤与次兵衛（1859-1922）は越前足羽郡六条村（福井市）の旧家の長男。家は旧幕時代に大庄屋をつとめた。明治 15 年（1882）泊園書院に入塾、のち県会議員、六条村長となる。明治 25 年（1892）衆議院議員。晩年は福井銀行の創立に関与し、のち取締役となった。

古井由之（1865-1937）は美濃不破郡垂井村（岐阜県垂井町）生まれ。明治 16 年（1883）泊

1) 本稿でいう実業家とは、銀行業や鉄道業といった近代産業の経営者のみならず、薬種商や酒造家なども含め、広く実業に携わった者を指す。また本稿で紹介する略伝の典拠資料はきわめて多数にのぼるため、逐一列挙しないこととした。なお、東咳・南岳叙位祝賀会の発起人であることは関西大学総合図書館泊園文庫所蔵の『祝賀会発起人名簿』（LH2\丙 117）の記載に拠る。LH2 以下はその請求記号である。

2) 各章の泊園書院出身実業家の略伝は、出身地の旧国名（加賀、摂津、播磨など）ごとに分けたいので、その生年が古い順から並べている。ただし、生年が不明な人物は、入門年その他の情報を勘案したうえで並べたので、すべてがこの通りであるとは限らない。

園書院に入塾、のち織物業を営み、垂井町長、県会議員、衆議院議員を歴任。また大垣共立銀行重役。明治41年（1908）泊園同門の桐山泰一とともに南岳の美濃遊歴を懇請する。

浅井佐一郎（1863-没年未詳）は遠州山名郡松原村（静岡県袋井市）の農家の次男。金原明善の水利学校に入学、のち同校の教頭・戸川深見（東暎門人）の勧めで泊園書院に入塾する。慶応義塾別科卒業後に静岡県会議員に当選、のち中泉貯蓄銀行の頭取となった。

## 2. 大阪出身の実業家

以下は東暎・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめた大阪出身の実業家の略歴である。

小山忠兵衛（1853-1919）は大坂南久太郎町（中央区）生まれ。家は疥癬薬を全国各地に販売した。稲垣秋莊（東暎門人）と南岳について漢学を学ぶ。家業では洋鏡販売を兼ねて盛大にする。一方、市会議員、府会議員に在職すること十余年であった。

豊田宇左衛門（二代目）（1853-1926）は大坂長堀橋筋一丁目（中央区）の人。泊園門人。初代豊田宇左衛門の長男。明治初年に家業の金融業を継承した。大阪竹屋町に設けられた泊園書院分院の建物は豊田が無償で提供したものである。養子の規矩治も泊園門人。

中井一馬（1853-1930）は大坂瓦町（中央区）の人。泊園門人。家は享保年間より創傷薬を開発・製造した。明治15年（1882）「ゆびぐすり」の商標権を得たのち、国内のみならず朝鮮、満洲、中国、南洋、アメリカにまで販路を拡張する。府会議員、市会議員でもある。

永田仁助（三代目）（1863-1927）は大坂高津（中央区）の米穀商の長男。明治11年（1878）泊園書院に入塾、のち大阪電灯社長、浪速銀行頭取などをつとめ、大阪財界の三元老の一人となる。貴族院議員。財団法人懷徳堂記念会初代理事長。養子の秀雄も泊園門人。

小西勘兵衛（1866-1941）は大坂内淡路町（中央区）の人。家は薬種商を営んだ。明治13年（1880）泊園書院に入塾、家業を継ぐも経営不振に陥ったため、明治33年（1900）他家より商標を得て酒類販売業を始めた。母・琴の墓碑銘は南岳の筆になる。

福本元之助（1866-1937）は大坂南綿屋町（中央区）の両替商の三男として生まれ、のち福本家の養子となる。明治11年（1878）泊園書院に入塾、明治13年（1880）逸身銀行を設立。尼崎紡績や大阪鋳業など諸会社の社長に就任した。「泊園会」では理事長をつとめる。

岡島伊八（1869-1932）は大坂安治川（西区）の薬種商の長男。明治36年（1903）泊園書院に入塾、大正4年（1915）まで研修する。家業を営むかわら、財団法人大阪職業紹介所の設立発起人および理事、盲人保護協会会長、大阪社会事業協会会長をつとめた。

岡橋治助（1870-没年未詳）は大坂船越町（中央区）の人。泊園門人。先代は第三十四国立銀行と天満紡績の頭取・社長をつとめるなど企業家として著名であった。木綿商を営み、勢和鉄道社長、帝国商船取締役、日本中立銀行支配人、中立起業監査役もつとめる。

杉村正太郎（1874-1943）は大坂南久太郎町（中央区）の人。家は江戸期以来の両替商で、先代は五代友厚の協力者。明治19年（1886）泊園書院に入塾、倉庫業を創め、北浜銀行頭取、

阪神電気鉄道専務取締役役に就任。弟の徳次郎、永三郎、猿之助も泊園門人。

川上利助（1875-没年未詳）は大阪備後町（中央区）の人。先代は両替商を営み、明治13年（1880）川上銀行を創立、また尼崎紡績および日本綿花の発起人。同行の主として先代の遺業を発展させ、また業務のかたわら区議員をつとめた。

小野助十郎（1877-没年未詳）は大阪古川町（西区）の人。泊園門人。明治29年（1896）大阪に「小野金属洋灯製造所」を創業、陶器を併用したランプを創作して評判を得る。大阪硝子商同業組合副組長、北区区議員、安治川連合衛生組合組長もつとめた。

新田長三（1888-1964）は大阪難波久保吉町（浪速区）の人。父の長次郎は「東洋のベルト王」と言われた。明治33年（1900）泊園書院に入塾、のち合資会社・新田帯革製造所の代表社員をつとめる。「泊園会」では評議員をつとめた。弟の昌次も泊園門人である。

上念政七（生没年未詳）は大阪南安治川通二丁目（西区）の人。泊園門人。安治川において名高い上念回漕店の店主であった。区政界の重鎮として活躍する。後述する筒井民次郎とともに財団法人大阪職業紹介所の理事をつとめた。

### 3. 近畿地方出身の実業家

以下は東暎・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめた近畿地方出身の実業家の略歴である。

木原忠兵衛（1853-1918）は摂津西成郡今宮村（大阪市浪速区）の人。泊園門人。大阪の両替商・木原家の養子となり、明治13年（1880）木原銀行を設立、同行の頭取となる。また尼崎紡績と日本綿花の発起人をつとめ、のち尼崎紡績の第二代社長に就任した。

羽間市蔵（1859-没年未詳）は摂津西成郡海老江村（大阪市福島区）の庄屋の子。明治23年（1890）泊園書院に入塾し、大阪府区議員、西成郡会議長をつとめる。他方、第百五十二銀行の頭取に就任した。父の伊右衛門の頌徳碑の撰者は南岳、書者は黄鵠である。

西尾与右衛門（1863-1925）は摂津三島郡吹田村（大阪府吹田市）の人。家は江戸時代に庄屋をつとめ、代々酒造業を営んだ。明治10年（1877）泊園書院に入塾。実弟の村田又兵衛も泊園門人で与右衛門と同じく数寄者として活躍した。

粟谷喜八（1869-没年未詳）は摂津能勢郡西郷村（大阪府能勢町）生まれ。明治17年（1884）より三年間南岳に師事する。家業の製茶貿易に従事、長く大阪茶業組合組長をつとめた。他方、大阪府区議員をつとめ、「泊園会」では理事に就任している。

筒井民次郎（1875-1941）は摂津西成郡九条村（西区）生まれ。南岳に師事し、大正期になっても泊園書院に通い続けた。塩商を営み、明治39年（1906）大阪塩問屋組合総取締に推され、大阪府区議員、衆議院議員もつとめる。黄鵠の日記『洗醒餘録』の発行者。

和田久元（1878-没年未詳）は泉州泉南郡山直上村（大阪府岸和田市）の人。家業は林業。明治25年（1892）泊園書院に入塾、のち村区議員、郡区議員をつとめる。また父の志を継いで植林経営を手掛け、続いて柑橘園を開くなど家業にいそしんだ。

久保田眞吾（1840-1917）は中河内郡中高安村（大阪府八尾市）の庄屋の子。泊園門人。郡書記などを経て大阪府会議員、貴族院議員をつとめる。他方、明治29年（1896）八尾銀行を創立してみずから頭取となった。顕彰碑「久保田眞吾碑」（南岳撰文）がある。

吉野五運（1859-1932）は河内郡六万寺村（大阪府東大阪市）の豪農に生まれ、のち大阪の売薬商・吉野家の養子となる。明治7年（1874）泊園書院に入塾、のち秘蔵の浜松歌国の地誌『摂陽奇観』の翻刻を許可した。長男の五三郎も泊園門人である。

木村敬二郎（1861-1936）は河内丹北郡三宅村（大阪府松原市）の人。大阪道修町の酒造家・木村家の婿養子となる。明治7年（1874）泊園書院に入塾、のち家業のかたわら大阪の各地に散在する墓碑を二十余年にわたって調査した。「泊園会」では評議員をつとめている。

中谷元造（1865-没年未詳）は中河内郡加美村（大阪市平野区）の人。泊園門人。府会議員に当選したのち、明治29年（1896）加美村長に就任。ついで郡会議員に選ばれ、のち郡会議長となる。他方、平野銀行および平野貯蓄銀行の常務取締役をつとめた。

高橋太郎兵衛（1872-没年未詳）は南河内郡中村（大阪府河南町）の人。家は旧幕時代に庄屋をつとめた。明治21年（1888）泊園書院に入塾、のち大阪府会議員や金剛水力電気社長となる。父祖の生前の功績を称えた「高橋記徳碑」の撰文を南岳に依頼している。

高田仁兵衛（1876-没年未詳）は中河内郡久宝寺村（大阪府八尾市）の人。泊園門人。家は代々久宝寺村の庄屋であった。久宝寺村長や蚕業組合中河内郡会長などをつとめる。他方、明治33年（1900）の時点で平野銀行の取締役であった。

前田熊市（1850-1919）は播磨美嚢郡上淡河村（兵庫県神戸市）の人。家は旧幕時代に庄屋をつとめ、また酒造業を営んだ。明治12年（1879）泊園書院に入塾、のち兵庫県の民権運動の中心人物となり、大沢銀行の頭取もつとめる。子の敬助も泊園門人である。

蓬萊三郎（1865-没年未詳）は播磨加東郡福田村（兵庫県加東市）の人。家は代々福田村に居住して大庄屋をつとめた。明治15年（1882）泊園書院に入塾、のち当主の兄・宗兵衛の早世を受けて、その嗣子・英男の後見人となる。東播銀行の頭取に就任している。

濱野延蔵（1867-没年未詳）は但馬朝来郡西牧田村（兵庫県朝来市）の人。明治16年（1883）泊園書院に入塾する。郡会議員をつとめ、朝来銀行の常務取締役を経て同行の頭取に就任した。また和田山銀行取締役、梁瀬銀行監査役でもある。

竹末朗徳（1866-1934）は摂津尼崎（兵庫県）の人。明治13年（1880）泊園書院に入塾する。翌々年に古沢介堂らの詩文集『高山流水余韻』を編集・出版するが、同書の序文は南岳が書いた。明治34年（1901）尼崎町長に就任、のち尼崎共立銀行の支配人となる。

下岡亀一（1868-1930）は摂津川辺郡中谷村（兵庫県猪名川町）の人。家は酒造業を営んだ。明治15年（1882）泊園書院に入塾、のち中谷村長、郡会議長となる。また広根銀行の頭取にも就任した。衆議院議員、朝鮮総督府政務総監をつとめた弟の忠治も泊園門人。

仲野安一（1875-1940）は淡路三原郡伊加利村（兵庫県南あわじ市）の人。家は江戸時代に庄屋をつとめた。明治24年（1891）泊園書院に入塾、明治42年（1909）伊加利村長となる。

他方、淡路銀行と神戸貯蓄銀行の取締役、淡路製陶会社の監査役に就任した。

白藤丈太郎（生年未詳-1939）は大和十津川（奈良県）の人。十津川郷士の子。明治11年（1878）泊園書院に入塾、のち東京の嘉納治五郎塾に学ぶ。その後大阪に合資会社・白藤商店を設立して石炭売買を営んだ。「泊園会」では理事をつとめる。

尼野源二郎（1866-1920）は大和十津川（奈良県）の人。十津川郷士の子。泊園書院に入塾、のち東京の嘉納治五郎塾に学ぶ。道頓堀弁天座を経営、のち大阪ホテルの刷新に貢献した。記念誌『尼野源二郎』には黄鵠の題字および談話が収められている。

玉置良直（1876-1934）は大和十津川（奈良県）の人。泊園書院に入塾し、さらに東京専門学校で学ぶ。のち林業を営むかたわら、県会議員や郡会議長、十津川村長をつとめる。大正9年（1920）衆議院議員に当選、昭和5年（1930）紺綬褒章を受章した。

#### 4. 中国地方出身の実業家

以下は東畷・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめた中国地方出身の実業家の略歴である。

湯浅豊太郎（1868-没年未詳）は伯耆汗入郡淡江町（鳥取県米子市）の人。村田晋（東畷門人）に師事し、上京して英吉利法律学校に入学。大阪に法律事務所を開設し、明治43年（1910）泊園書院に入塾。大阪弁護士会副会長や共栄社石鹼製造所社長をつとめた。

門脇才蔵（1871-没年未詳）は伯耆八橋郡安田村（鳥取県琴浦町）の豪農の次男。明治21年（1888）泊園書院に入塾、のち上京して根本通明や川合清丸（南岳門人）に師事する。帰郷して米子銀行の取締役に就任するとともに数寄者として活躍した。

右田三吉（1853-1932）は石見美濃郡益田本郷村（鳥根県益田市）の人。明治12年（1879）泊園書院に入塾、帰郷して県会議員となる。明治15年（1882）石見立憲改進黨が結成されると入党した。また酒造業を営むかたわら山陰道産業会社の監査役に就任する。

大西秀太（1863-没年未詳）は備中浅口郡六條院村（岡山県浅口市）生まれ。明治12年（1879）泊園書院に入塾、のち塾頭となる。ついで関西法律学校で学んだ。神戸に出て<sup>ぼっかんさなだ</sup>麦稈真田輸出来に従事し、のち神戸麦稈同業組合副組長。弟の虎造も泊園門人。

山本國次郎（1883-没年未詳）は備後沼隈郡松永町（広島県福山市）の人。備前の閑谷巖に学び、明治33年（1900）泊園書院に入塾。のち地元で松永実業銀行の取締役をつとめた。山本家には南岳の署名・印章が付された屏風、扁額、掛軸などが多数所蔵されている。

頼俊直（1863-1926）は安芸賀茂郡竹原町（広島県竹原市）の人。頼春風（春水の弟、山陽の叔父）の曾孫。泊園門人。塩田地主として土地集積を進め、また竹原銀行の頭取に就任する。他方、町会議員を経て明治27年（1894）衆議院議員に当選した。

尾中郁太（1866-1912）は周防佐波郡田島村（山口県防府市）の塩田所有者の長男。明治15年（1882）泊園書院に入塾、のち東京の東洋英和学校に学ぶ。帰郷後の明治29年（1896）塩田貯蓄銀行を設立、のち頭取に就任。著書『鯤鵬詩草』の序文は南岳が書いている。

古谷熊三（1866-没年未詳）は周防三田尻（山口県防府市）の人。周陽学舎で学んだのち、明治14年（1881）泊園書院に入塾。帰郷後は塩田を経営し、明治29年（1896）塩田貯蓄銀行に入行、中関本店の支配人を経て明治36年（1903）取締役に就任する。

宗像祐太郎（1866-没年未詳）は長州萩（山口県）生まれ。泊園門人。父は同志らと大阪堂島米商会所を設立し、のち副頭取に就任する。若くして大阪に出て仲買業に従事、大正4年（1915）同志らと大阪曹達を設立、のち第二代社長に就任した。

## 5. 四国地方出身の実業家

以下は東咳・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめた四国地方出身の実業家の略歴である。

安藤家恭（1846-没年未詳）は讃岐豊田郡植田村（香川県観音寺市）の人。泊園門人。植田村戸長をつとめたのち、明治30年（1897）讃岐煉瓦株式会社を設立して社長に就任、その後観音寺に分工場を開設する。南岳が讃岐を訪れた際には、自宅に招いてもてなした。

西本千太郎（1856-1928）は讃岐高松（香川県）の人。高松藩家臣の子。明治7年（1874）泊園書院に入塾、さらに備中の犬飼松窓に学ぶ。のち南岳に招かれて泊園同門の頼富実毅とともに泊園書院の塾政を整理した。退塾後、三島実業銀行の支配人となる。

加藤和美（生没年未詳）は讃岐香川郡由佐村（香川県高松市）の人。明治15年（1882）泊園書院に入塾する。帰郷後は由佐村長や由佐郵便局長をつとめる。他方、実業にも熱心で、琴平銀行および高松水産会社の取締役であった。

広瀬浚太郎（1868-1945）は讃岐寒川郡石田村（香川県さぬき市）の篤農家の長男。明治22年（1889）弟の雄次郎とともに泊園書院に入塾する。実業界に身を投じ、高松商業銀行や高松電気軌道の取締役をつとめた。南岳渡讃の際には周旋の労を執っている。

瀬尾 等（1871-1933）は讃岐阿野郡端岡村（香川県高松市）の素封家の三男。泊園書院に学び、明治27年（1894）慶応義塾別科を卒業。明治29年（1896）端岡村長となり、さらに郡会議員や県会議員に就任、また東讃電気軌道、塩江温泉、四国民報の社長を歴任する。

赤尾好太郎（1876-没年未詳）は讃岐高松（香川県）の人。明治22年（1889）泊園書院に入塾、実兄の逸見常太郎と実弟の逸見貞次郎も泊園に学ぶ。帰郷して高松商業銀行の常務取締役に就任した。一方、明治・大正期にかけて市会議員に当選する。

芳谷弥平（生没年未詳）は讃岐高松（香川県）の人。泊園門人。呉服太物商を営み、明治41年（1908）高松商業会議所が設立されるとその常議員となる。また大正期において高松呉服太物組合の組長。他方、高松市会議員に当選し、のち市会副議長をつとめた。

## おわりに

これまで泊園書院に学んだ実業家のうち東咳・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめた人々の略

歴をざっと見てきたが、彼らの性格を生まれ、修学、実業家としての活動、政治家としての活動、その他の活動、退塾後の泊園書院とのかかわり、の六点に分けて論じてみたい。

まず一点目の生まれについて。生年は、年号別に示すと、天保1名、弘化1名、嘉永6名、安政4名、文久6名、元治1名、慶応12名、明治初年代16名、明治10年代3名、明治20年代1名、不明4名となり、慶応から明治の初めの時期に集中している。出身地は、近畿のみならず中部、中国、四国まで分布し、なかでも大阪府と香川県の出身者が多かった。また大阪出身者の先代には著名な企業家や業界の先駆者がおり、地方出身者の先代には庄屋をつとめた者が多いこともわかる。

次に二点目の修学について。大きな特徴としては、一家をあげての入塾が多く見られることである。本多、杉村、新田、西尾、下岡、大西、広瀬、赤尾は兄もしくは弟とともに、豊田、永田、吉野、前田は子とともに泊園門人であった。また進学先は泊園人脈を頼って決めたこともあったらしく、浅井と湯浅は東畷門人に学んだのち泊園書院に進み、門脇は泊園書院に学んだのち南岳門人に師事している。

続いて三点目の実業家としての活動について。大阪では日本全国もしくは海外を舞台に業務を展開する薬種商、近代産業とされる銀行業や紡績業をみずから経営する両替商が多く見受けられる。またそうした商家出身実業家のなかでも永田と福本は大阪財界をリードする存在であった。一方地方では農家のみならず、酒造業、織物業、塩業などの在来産業に携わった者が多く見受けられ、彼らは銀行業の経営にも積極的に関与している。

四点目の政治家としての活動について。彼らは実業界と同等か、もしくはそれ以上に政界で活躍している。具体的には、大阪では区会議員、市会議員、府会議員、地方では村長、町長、郡会議員、県会議員に就いており、おもに地方政治家としてそれぞれの地域の自治に貢献している。ただし、衆議院議員当選者が5名、貴族院議員当選者が3名おり、資産や名声を足掛かりにして国政に進出していく者も少なからず存在した。

五点目のその他の活動について。岡島、上念、筒井は財団法人大阪職業紹介所の運営にあたり、実業家だけでなく社会事業家として活動していたといえる。また財団法人懐徳堂記念会の初代理事長をつとめた永田は、大阪における漢学振興の中心人物であったといえる。一方、この種の活動は地方ではあまり見られない。

最後に六点目の退塾後の泊園書院とのかかわりについて。福本、新田、栗谷、木村、白藤といった大阪を本拠とした実業家は、学術組織である「泊園会」の理事や評議員としてその運営に関わっている。一方、地方を本拠とした実業家は、院主の地元遊歴を懇請して自宅に招いたり、頌徳碑の選文や著作の序文を院主に求めたりするなど何らかのかたちで泊園書院とのかかわりを維持している様子が窺われる。

以上のように、明治維新时期頃に生まれた大阪および西日本各地の豪農・豪商のなかに一家をあげて泊園書院に学んだ人々が存在し、彼らは帰郷後に江戸時代以来のビジネスに従事しつつ、銀行業や紡績業といった近代産業の設立・運営にも関わっていったのである。また彼らは地域



の名士として実業界だけでなく政界でもそのリーダーシップを発揮し、大阪においては社会事業や文化活動にも積極的であった。他方で彼らは東暎・南岳叙位祝賀会の発起人をつとめるのみならず、「泊園会」の役職就任や院主への撰文依頼などを通して継続的に泊園書院との関係を維持していった。こうした彼らの人生の軌跡から窺えるのは、漢学と日本の近代は実業家という一群の人々の活動を通して密接な関係があったという事実で、実業家が漢学にどのように関わっていたのか、漢学をどのように捉えていたのかといった問題は、引き続き注目すべきテーマだと思われる。

〔付記〕本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業の若手研究「近世近代移行期の大阪漢学と地域社会—泊園書院出身者の意識と行動を手掛かりとして」（課題番号 20K12841、研究代表者：横山俊一郎）および基盤研究（B）「泊園書院を中心とする日本漢学の研究とアーカイブ構築」（課題番号 18H00611、研究代表者：吾妻重二）における成果の一部である。